

GP特集：書評論文3

中村文哉 編著 志村哲郎・正司明美 著『生と死の人間論』（ふくろう出版、2009）

如何にして社会福祉の「可能性の条件」を問うか？

『生と死の人間論—社会福祉学と社会学との〈あいだ〉で—』

本石修二

本書は三部から構成されている（各部の章節は省略する）。

第Ⅰ部 人間とはどういう存在なのだろうか？

—人間の生の構造とその社会的構成—

第Ⅱ部 家族とジェンダーの視点から〈生・老・病・障・死〉を考える

—〈社会福祉の人間論〉という試み？—

第Ⅲ部 死という臨床場面における〈関係の世界〉とケア

—〈死に逝くこと〉〈死と向き合うこと〉をめぐるソーシャルワークの見地から—

本書は冒頭に全体の主題と「三つの狙い」が示されている。ここでは、まず「人間の生の構造とその社会的構成」という主題が示される。そして人間存在（人間であること human being）にとって最も切迫した現実である人の「生と死」という主題を考察の通奏低音として、具体的な事例に触れつつ、「三つの狙い」が相互に関連しながら展開されていく。

第一の狙いは、「生と死」と「人間とは何か」という二つの問題の連関への問いである。社会福祉（学）が人の「生と死」に関わる実践とその実践についての学問であることからすれば、この「二つの問題の連関」は社会福祉の第一の主題である。より正確には、この第一の狙いこそが、社会福祉の対象に関して「問われることのなかった前提」なのであり、そこへと立ち戻ることが求められる「社会福祉の本来の意味」の起源でもある。

第二の狙いは、社会福祉の第一の主題でもある「人間」についての問いである。著者は、こうし

た問いを「社会福祉学の前提にある根底的な問い」とであると指摘している。ここで注意しなければならないのは、「社会福祉」が社会現象として、われわれに立ち現われる際には、こうした「根底的な問い」がつねに隠蔽されていたということである。より厳密に言うならば、ここで指摘された「根底的な問い」が隠蔽されていたという事態そのものが、つねに隠蔽されてきた。そして、われわれの日常生活は、この「隠蔽の隠蔽」に気づくことなく進行する生の現実にはかならない。

本書で展開された考察では、「隠蔽されていた根底的な問い」にまで立ち戻り、人間存在の意味を考慮しなければならないことが示された。人間存在の意味への問いが隠蔽されたままでは、社会福祉実践は、自らの主題の本来の意味、すなわち「社会福祉実践の目的」が不明確なまま行なわれることになってしまう。さらには、実際の社会福祉実践が単なる既定の作業として、すなわち「単なる技術」（p.5）⁽¹⁾の習得として、目標が想定されかねない。こうした事態は、社会福祉本来の「目的と方法」の倒錯を意味する。それは社会福祉に求められてきたその「本来の意味（本質）」の喪失という事態である。すなわち、そもそもわれわれにとって「社会福祉」とは、いったい如何なる意味があるのか不明確になってしまうということである。視点を変えて見れば、このように「隠蔽されていた根底的な問い」に立ち戻ること、
「社会福祉の可能性の条件」をその「本来の意味」の起源にまで立ち戻り、そこから生成過程を明らかにすることが可能になるかもしれない。それは「社会福祉の系譜学（genealogy）」ということが

如何にして社会福祉の「可能性の条件」を問うか？

できよう。

第三の狙いは、「社会福祉(学)の領域に対して、社会学的な切り込み方をする点にある」(「はじめに」)。ここでは、社会福祉を社会現象として捉えること、すなわち方法論的に社会学的分析(あるいは批判)を通じて社会福祉実践を社会的現実として捉えることが目指されている。端的に言えば、それは「社会福祉の社会学」という企図である。第二の狙いに連関させて言えば、それは社会福祉の社会学的基礎づけを意味する。すなわち社会学的方法によって「社会福祉」を社会現象として「観察・記述・説明」することである。

本書で展開された人間とその「生と死」をめぐる社会福祉学と社会学との諸考察は、たんにその主題を共有しているというだけでなく、人間理解についての基本的な態度も共有している。その基調は、人間存在を関係性から捉えるという態度である。つまり社会現象を「人と人との相互関係」(p.2)における「相互行為現象」(p.30)として理解し、人間存在を「実体的なもの(substantial)」としてではなく、「関係(=関数(functional))という在り方」から理解することである。

こうしたことを基調にして捉えられた社会福祉という事象は、「社会的ニーズ」を必要とする人と、そうした人びとに「社会的サービス」を提供する人との相互行為をその原形としている。そこには、社会的な相互行為の「可能性の条件」として、人間存在の複数性、すなわち他者との共同存在という在り方が潜在している。この人間存在の複数性が人間的生の在り方の原形である。なぜなら、人間は生物学的にも、まさに「人と人との間」に生まれ、まず「親」に養育されることによって、あるいは「他者のケア」(p.42)によって、はじめて成長することができるからである。こうした人間存在の複数性を基盤にして「相互依存性」(p.44)や、その時間軸の拡大によって「世代間倫理」(p.45)を論ずるための問題設定も可能となる。こうした事態について、ひとつの明確な視点を提示したのがハンナ・アーレントであった。アーレントは人間の「生と死」に関して、人間存

在の複数性と相互性に着目し、「最も政治的な民族であるローマ人の言葉」を指摘している。つまり「生きる」ということを「人びとの間にある(inter hominess esse)」こと、そして「死ぬ」ということを「人びとの間にあることを止める(inter hominess esse desinere)」ことと同義語である、と述べている⁽²⁾。

人の「生と死」に関するアーレントの指摘から示唆されるのは、人の生を「人びとの間にあること」とする考え方を「人と人との相互関係」における「相互行為現象」という現実のうちで、いかに解釈するか、さらに言えば、いかに解釈すべきか、という倫理的問いである。すなわち「人の生」と「人間存在の相互性」の連関についての問いである。そして、そこから同様に「人びとの間にあるのを止めること」としての「人の死」についても解釈することができよう。しかしながら、ここで指摘された「人びとの間にある」という事態は多様な意味を担っている。つまり「人間の「いのち」には「生物学的いのち」と「精神的いのち」の二つの側面がある」(p.96)と指摘されているように、人の生は、その可能性の条件として、生物学的生命(生物living thing)を必要条件とし、人格的生命(生ける人格living personality)という在り方をその十分条件としている。

このように人間存在を複数性と相互性という観点から捉えなおし、あらためて人の「生と死」を「人と人との間」の社会現象と捉えるならば、その現象のうち社会福祉の「本来の意味」の基盤を探究することができる。この社会福祉の基盤は、その思想的な根拠とされてきた「ギリシア的博愛」や「キリスト教的慈愛」の根底ともいべき次元である。つまり、人間存在の複数性と相互性は、人の生の十分条件である「生ける人格」の複数性と相互性として、相互人格性を形成している。そしてこの相互人格性が社会福祉の基盤となっている。すなわち「社会的ニーズ」を抱く人に対して、必要な「社会的サービス」を提供するという相互行為は、その生の条件を満たすために要求する他者と、その要求に対して応えようとする(社会

福祉の担い手としての)「私」との間での出来事である。そこで必要なのは、他者の生の要求に対して「応える能力」および「応えようとする態度」である。こうした能力と態度は他者に対する「応答能力(response ability)」あるいは「呼応可能性」と呼ぶことができよう。そして「他者への応答」は、人間存在の複数性と相互性を基盤としつつ、同時に相互性を維持し、あらたに人間存在の共同性を構築し続けている。つまり、「他者への応答」は人間存在の基盤になっている。そしてこの「他者への応答」が生じるということは、他者の生の要求に対する「私」に「責任(responsibility)」があり、それと同時に「私」の生の要求に対しても他者にも責任があるという事態である。こうして人間存在の相互性は、相互応答性として理解されるべきであり、そこには人の生に対する「責任」の自覚が要請されている。

本書における諸考察をつうじて、社会福祉(学)の「モチーフ(主題と動機 motif)」を明確にするための問題設定が示された。それは社会福祉についての社会的・学問論的考察の成果であり、同時に「社会福祉学の基礎を固めること」にほかならない。このようにして示された問題設定を引き受けることが、社会福祉の担い手の各々にたいして、社会福祉的現実の「本来の意味(本質)」と、そこでの事態に対する「応答としての責任」の自覚を喚起することを意味する。ここで獲得された考察の成果は、けっして社会福祉に関する個々の問題の「正解」や実際の問題解決のための「マニュアル」ではない。そして第二の狙いに関連する「社会福祉学の基礎を固める」作業は、通常の意味で「完結」ということはないだろう。というのも、社会福祉は、歴史的な社会のうちに「生成し続ける現実」の社会福祉現象に関わるのであって、けっして無時間的に固着した「既定の現実」を想定すべきではないからである。

最後に、本書は想定されていた読者(社会福祉を学ぶ大学生)を超えて、そもそも人間存在そのものを学問的営為の「モチーフ」としてきた哲学や倫理学(とくに生命医療倫理や世代間倫理等々)

に関心をもつ人たちにも、その各々の思考のフィールドワークにとって貴重な「素材」を提供していることも強調しておかねばならないだろう。(東洋大学・帝京科学大学非常勤講師)

註

- (1)本書からの引用は、引用直後にその箇所、頁数を指示する。
- (2)ハンナ・アーレント『人間の条件』ちくま学芸文庫、(1994) p.20

リプライ

社会福祉学と社会学と哲学の間

—本石修二氏へのリプライ—

中 村 文 哉

1. 社会福祉学と社会学の〈あいだ〉

『生と死の人間論』と題する本書のコンセプトは、社会福祉学と社会学との対話にある。編者は、一社会学者として社会福祉学部に身をおく。この立場からすると、極めて自明なことではあるが、社会福祉現象は社会現象である点で、社会福祉学と社会学は問題圏を共有しているはずである。だが、それにも拘わらず、社会福祉学と社会学との間には、じっくりいかないところがあるようだ。なぜだろう。

これには理由があるように思われる。社会学が主題として取りあげるいくつかの現象のうちには、例えば社会問題の一環という位置づけのもと、社会福祉現象に関わることがしばしばある。だが、社会福祉学からすると、社会学が重大視する現象は、社会福祉学の出発点としての前提をなすものであり、この意味で、社会福祉学にとって、それ自体は社会学が主題化させる意味において必ずしも重大視する必要のない論件として扱われる。このように、両者は、同一の問題を主題化しつつも、どこかですれ違ってしまふ。

だが、歴史を紐解けば、社会福祉学の専門的対象である社会福祉現象は、社会学的思考を鍛えあげてきたといえる。例えば、社会福祉調査法の原型とされる社会踏査法 (Social Survey) の展開をバネに、社会調査法はダイナミックな展開をみせ、社会学方法論の一角として、その確固たる地位を築き上げてきたこと、更にシカゴ学派に典型的にみられるように、都市問題研究や細民研究等、社会問題研究の展開においても、社会踏査をバネにダイナミックな展開をみせ、社

会変動と人間行動の変容、文化と生活等に関わる社会理論を数多く産出してきた。これらのことを顧みれば、やはり社会福祉現象と社会現象、社会福祉学と社会学の関係は、双方のこれからの展開においても、重要な意味をもち続けるはずである。今や専門諸領域の準位で多岐に分化された社会福祉学系の学会が多く組織され、独立科学としての地位を獲得したが、社会福祉学は依然として最広義の社会学の一部をなすのは、こうした歴史を享けてのことであろう。

さて、本書が成書されるに至ったその端緒は、社会福祉学と社会学のこうしたねじれの間接性、ある意味では強引と思われるような仕方で、際だてることから始まった。それは、次のように表現できよう。即ち、社会学からすると、社会福祉学は実践の学を志向するため、問題となっている現象の原因を十分に解明しないまま、解決法をさぐることに躍起になることに対して、社会福祉学に苛立ちを覚える。逆に、社会福祉学からすると、社会学は余りにも問題となっている現象の重大性を強調しすぎ、その解決法を軽視してその現象の説明に躍起になることに対して、社会学に苛立ちを覚える。

本書の構想を発表する本学部の研究会で、社会学のサイドからは、次の問いを發した。社会福祉学は、社会福祉実践という利他的な営為の根を、どのように基礎づけるのか。あるいは、こうした基礎づけは、最初から等閑に付されてよいものなのか。より簡潔に言えば、それは、福祉という人間的営みの利他性は、何に起因するのか、そして福祉という人間的営みとその利他性を不問に付し

て、社会福祉学は、一つの学問として成り立ちうるのか、という問いである。

この問いに対して、どう基礎づけるのかということよりも、ソーシャルワーカーとして取り組まなければならない現実やクライアントがそこに存在する以上、この事実こそが出発点にならざるを得ず、社会福祉学はクライアントやソーシャルワーカーと歩みを共にする、という反論が、社会福祉学のサイドからなされた。

社会福祉学サイドが、社会学サイドからの「喧嘩」に、真っ向から対峙するスタンスをとってくれたため、社会福祉学と社会学との間でなされる、極めて実験的な性格の強い営みが一つのかたちになった。二つの問いの両立可能性は如何に開かれるのか、それが本書の根底をなす問題関心である。だが、今回、両者が会おうもう一つの地平があった。それが「生と死」というテーマであった。これは、死をめぐる利他的な行為と経験という問題系をなす。人間に不可避なこの抜き差しならぬ共通の主題が、特色GPのデザイナーにより既に準備されていたことは幸いであった。

この実験は果たして成功しているのだろうか。それは読者諸氏の判断に委ねることにして、社会福祉学と社会学との間で、どのような対話が可能であるのか、社会福祉学にとって社会学は何であるのか、そして社会学にとって社会福祉学は何であるのか、という問いが拓かれた。この件に関しては、後述するが、この問いに対する解答は容易に導き出しえぬものであろう。だが、〈人間〉という問題領域を地平とすることにより、両者の間には対話の可能性が開かれていることを、特に本書のⅢ部を通じて読み解いていただければ、幸いである。

社会福祉学にとって、社会学はその〈外部〉に位置づけられる。〈社会福祉学的にもものを見ること〉の幾分の一には、〈社会的にもものを見ること〉が含まれているはずである。こう考えると、社会福祉学と社会学は、学問領域としては「内-外」の関係でありつつも、重層的な関係におかれているのかもしれない。だが、ここで問われるべきは、

両者の関係如何である。社会福祉という世界を社会学という〈外部〉から捉えること、あるいは社会福祉学という世界のなかに、社会的なものを読み解いていくことから、一体、どのようなことがみえてくるのだろうか。

こうした本書の狙いに対して、もう一つの〈外部〉を設定することが可能である。その〈外部〉とは、哲学である。今回は、社会学の〈外部〉をなす哲学者より、本書の書評を頂いた。周知の通り、共同性という人間存在の本質を問う点で、社会学は哲学の一領域であった（因みに、このことを端的に示すものとして、和辻哲郎の『人間の学としての倫理学』（1934,岩波書店）を挙げることができよう）。哲学は、社会学の、そして社会学とは類縁的関連をもつ社会福祉学の、両者に共通の〈外部〉として位置づけることができる。果たして、哲学という〈外部〉からみえてくるものは、何であるのだろうか。

書評を頂いた本石修二氏は、長らくフッサール現象学の研究に携わった後、生命倫理や医療倫理に、実践面も含めて、深くコミットしてきたキャリアをお持ちである。

本石氏の書評は、丁寧かつ周到な読解に裏づけられているだけでなく、極めて明快なテキストを展開されている。まず、本書を丁寧に読み込んで頂いたこと、そしてこのような優れた書評を頂いたことに対して、本石氏に深謝申し上げたい。

2. 「社会福祉学の基礎づけ」問題と「社会福祉の系譜学」の可能性

さて、本題に入ろう。まず、本書の基礎的な位置づけに関して、書評と本書が共有しあう点を確認しておきたい。本石氏の書評は、テキストを構造化させている論理の背景のなかに降り立ち、隠れてはいるがそのテキストを可能ならしめるものを掘り出す視座のもとに、展開されている。

ここでの主題は、「社会福祉」という人間の営みであり、その営みから構成される社会福祉現象である。この「社会福祉」という言葉には、それを営み、その対象となる複数の人間、即ちクライ

如何にして社会福祉の「可能性の条件」を問うか？

アントとサービス提供者(ソーシャルワーカー)の存在が前提されている。本書Ⅱ部で展開された議論の基底に登場する〈女-男〉、〈障害者-健常者〉という間柄(関係)、本書Ⅲ部で展開された〈死に逝く者と残される者〉との関係に通底するのは、その複数性の具体的なあり様である。

そして、これらの対置関係にある両者は、自らの生を生きる存在であり、そしてそうであるが故に、必然的に死に逝く存在である。だが、これらのことは、社会福祉実践のなかでは、特別な事情がない限り、人々の意識に上ることなく、忘却されるという意味において、自明な事柄である。このことは、福祉実践の場だけでなく、日常生活においても、当てはまることである。「われわれの日常生活は、この『隠蔽の隠蔽』に気づくことなく進行する生の現実にはかならない」とは、このような意味で理解できる。

では、敢えてこの自明な点に立ち止まることの意味は、何にあるのだろうか。それは、「われわれにとって『社会福祉』とは、いったい如何なる意味があるのか」、おそらくはごく当たり前のことであるが故に、忘却しがちなその「本来の意味(本質)」に敏感であり続けなければ、福祉の営みは、その本来の意味において、成就しえない事態が待ち受けているということではないだろうか。

福祉実践が他者への配慮としてのケアを機軸に成立するのであれば、「心が通いあうこと」ないし「心を通わせあうこと」が、その通奏低音をなす。なぜなら、ニーズ通りのサービスを行っても、クライアントが機械的な扱いを受けるのであれば、そこに残るのは「遺恨」である。それは人間関係が物象化された姿であろう。福祉実践が、単に福祉サービスを提供するだけの営みにとどまらないのは、それが利他性を前提とする、我と汝の生き生きとした出会いに基づく社会的相互行為だからである。このように、社会福祉の「隠された意味」をたどっていくと、〈社会福祉の世界〉と〈日常生活の世界〉との、思わぬつながりがみえてくるかもしれない。本石氏が指摘された「社会福祉の系譜学」の狙いはこの点を明らかにする

ことにある。それは、社会福祉を、そして社会福祉学を異化させる役割を担うものの一つであるといつてよいだろう。尤も、同じ意味において、哲学も、その担い手の一つ足りうると考えられるが、この点からは逆にどのような構想が広がるのだろうか。今後の哲学による、そして何よりも本石氏ご自身による展開を期待したい。

ところで、本石氏からは、書評を頂いた後に、メールにて、三つの問いを頂いた(本石、「書評・『リプライと問い』のためのメモ 2009/12/02」)。このうち、問いの①と②は、上記の件に関わる問いであるので、ここで紹介しておこう⁽¹⁾。

問い① 社会現象としての「社会福祉」 ("How"-problem)

社会福祉を社会現象として捉え、社会学的に「それはどのようにあるか(How is it?)」という分析は、「社会福祉の社会学」の企図であり、「社会福祉の基礎づけ」を意味する。そこでは、社会福祉を社会現象として「観察・記述・説明」という科学的な態度から分析が遂行される。しかしながら、こうした問い(How is it?)には、この問いが可能となる前提がある。つまり、「それはどのようにあるか」という問いの「それ」が何であり、「何を意味する」のかということを知っていなければならないであろう。もし、あらかじめ「それが何であるか」を知らなければ、「何を観察・記述・説明しているのか」がわからなくなってしまおうから。しかしながら、実際に分析が遂行される際には、「それは何であるか」という問いに対する答えは、あらかじめ獲得されている。ただ、それがどれほど明確に自覚されているかである。→社会学的分析の前提となる「社会福祉とは何か?」という問いへの答えは、そのつどの社会学的なパラダイムにおける「社会福祉」の定義となってしまうのか?(本石、「書評・『リプライと問い』のためのメモ 2009/12/02」)

社会学が社会福祉現象を一つの学問的対象として捉え、「それはどのようにあるか (How is it?)」を分析する際 (「社会福祉の社会学的分析」)、通常は、「How is it?」という問いそのものに、直接、解答しようとする。しかし、この問いは、「it」が予め何であるのかがわかっている、初めて問うことができる。だが、通常、私たちの関心は、あくまでも「How is it?」という問いそのものに向けられてしまい、「it」が予め何であるのかについては、無自覚なことが多い。

以上を踏まえて換言しよう。即ち、「社会福祉 (学) はどのようにあるか (How is it?)」という問いは、「it」=社会福祉 (学) とは何か、という問いを隠蔽してしまう。従って、この問いに対する解答は、「it」=社会福祉 (学) をどう定義するのか (意味づけるのか) により、大きく異なることになる。「『社会福祉の社会学』の企図」は、この点をどう考えるのかにより、その構想も大きく異なることになる。そこで、重要になるのが、以下の②の問いである。

問い② 社会福祉の意味基盤とその方法論的困難 (“What”-problem)

「社会福祉とは何か?」という問いは「社会福祉とは何を意味するのか?」という問いに置き換えられる。というのも「それは何か? (What is it?)」という問いの答えは、「それは何を意味するのか? (What does it mean?)」という問いに答えることによって、はじめてその内実が理解可能になるからである。そしてこのように「その意味」を答えることは、その存在の意味を理解することであり、存在を基礎づけることであろう。このように考えてみると、「社会福祉の基礎づけ」のためには、その意味基盤が必要である。[つまり]社会福祉の「可能性の条件」を考えるための人間存在論が要請される。それは人間理解という観点からすれば、「人間存在の複数性と相互性」を基本的態度とすることであった。こうした事態は、社会福祉の基礎づ

けが「社会福祉」という個別の専門学科それ自体の「内部」では十分に達成することができないことを意味する。つまり、端的に言えば、社会福祉の基礎づけのためには、社会福祉の「外部」あるいは社会福祉「以前」の次元である意味基盤として生活世界が社会福祉の根底として考えられる。これは、科学の基礎づけのためには、科学的世界と対比される生活世界が、科学の「外部」であり科学「以前」である世界として想定されているのと同様である。(より厳密には、生活世界が理論的に「想定される」あるいは端的に「要請される」というのではなく、生活世界は意味基盤として現実中存在している。)

しかしながら、社会福祉の生活世界を主題化していく際には、科学的世界と対比される生活世界を主題化していく場合に比べて、固有の困難があるように思われる。それは、「生活世界の多義性」による根本的な問題であると同時に、われわれが生きている経験的現実の世界 (すなわち生活世界) には、すでに「社会福祉」の契機が浸透していることに起因する。というのも、「社会福祉」の理念に基づく社会福祉実践が遂行されるのは、つねに経験的現実としての生活世界においてであり、そしてそこにおいてのみ社会福祉実践が「有意義な実践」となりうるからである。これは科学の様々な成果が生活世界に浸透するという仕方、科学を含みこんでいく生活世界が、その意味基盤としての機能と内実が豊かになっていく過程に比べて、社会福祉実践の様々な成果が、様々な仕方、生活世界に浸透する過程は、自然科学の成果が浸透する以上に複雑に、また深く交錯しているように思われるからである。すなわち、社会福祉実践は、そもそも人間存在の構成契機として、人間存在の「原初形態」のうちで遂行されてきた。そして「人間存在の複数性と相互性」という在り方とそうした (社会福祉) 実践は、時間的・歴史的な契機を考慮するならば、相互に

如何にして社会福祉の「可能性の条件」を問うか？

原因となり、結果となり、つねに変容しつつ持続してきたのであろう。そこでの社会福祉実践は、自らの根底として生活世界を意味基盤とすると同時に、その基盤としての世界の意味内実をさらに豊潤にしていく過程でもある。→こうした過程を追究することはいかんにして可能か。その追究のための方法論は明確になっているのであろうか。(本石、「書評・『リプライと問い』」のためのメモ 2009/12/02)

ここで問題にされている「社会福祉学の基礎づけ」とは、社会福祉学の学問的な根拠となる(意味)基盤が何にあるのか、つまり社会福祉学とは、人間の営みの何に根拠をもっているのか、という社会福祉学の本質への問いを意味する。この問いをより直接的に表現すれば、“how”を問うことによって隠蔽される「社会福祉とは何か？(What is it?)」の問いになる。これは本石氏からの「問い①」で論じられた、「社会福祉(学) = “it”」とは何か、という問いの、もう一つの表現である。

この問いに答えるには、「社会福祉の『可能性の条件』」を考えるための人間存在論が必要になる。このことは、(クライアントとソーシャルワーカーという)複数の人間を欠如して社会福祉(学)は成り立たないことの証左となる。ここにおいて社会福祉(学)の基盤を突きとめるために必要となるのが、「人間存在論」ということになる。そうである以上、社会福祉(学)の基盤=根拠を求めるには、社会福祉(学)は、その〈外部〉にある人間存在論へと降り立たねばならないことになる。「社会福祉の『外部』あるいは社会福祉『以前』の次元である意味基盤として生活世界が社会福祉の根底として考えられる」のは、そのためである。

ところで、社会福祉学が〈外部〉へと降り立たなければならないその背景には、現象学的学問論が横たわっている。人間は、自らの世界体験(=自らの生)に対して、自ら意識のなかで主観的に意味構成を行い、その体験に一つのリアルな意味をみいだしながら生きる。他方、社会学や社会福祉学といった学問は、主観的に構成される世界体

験のあり様に対して、その〈外部〉にある科学的に構成された概念や概念図式を当てはめ、人々が主観的に構成している世界体験や社会的現実に関する科学的解釈を構築していく。その構築の仕方によっては、人々が主観的に構成している世界体験や社会的現実、科学的概念という「理念の衣」を被せられ、その本来的な生き生きとした意味を疎外させてしまう危険性が生じる。例えば、得も言われぬ倦怠感と体の熱さを感じ、それらを訴えるも(自らの体験の主観的意味)、看護師から渡された体温計が客観的に微熱を示せば、「そんなものは根拠のない主観的な訴え、つまり不定愁訴」と医学的(科学的)に判定されてしまうケースが、その実例である。フッサールが『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』を著した問題関心は、このことにあった。学問的認識や営みが、人々の生きる現実を蹂躪しては、医学も社会福祉学も成立するはずがない。だが、時としてそのようなことがまかり通ってしまう場合がある。クライアントの言葉を無視しては、如何なるニーズも引き出すことはできない。現象学的学問論が差し示すのは、科学と人々の世界(生活世界)の関係に関わる問題系であり、社会福祉(学)も、このこととは無関係ではありえない。

では、社会福祉(学)の「外部」あるいはそれ「以前」の次元に降り立つには、どうすればよいのだろうか。ここで留意しなければならないことは、社会福祉学の場合、社会学という学問的世界と生活世界という両者の対立図式を鮮明に描けない点にある。本石氏の指摘する方法論上の「固有の困難」は、この点にある。それは、社会福祉実践が人々によって既に営まれてきたからである。それは、ケアとして、人助け、手助け、世話等として、生活世界のなかで既に実践されている。そして、それらが習慣化され、慣習化され、一つの行為体系となるその延長線上に、福祉実践という行為の営みが成立している。それ故、社会福祉学は、一つの体系をもつ学問の世界として生活世界に対置する仕方では存立していると同時に(「外部」性)、生活世界における人々の営みや態度か

ら生成したもの（学問「以前」性）ということになる。ここに、社会福祉学特異の事情が横たわっている。つまり、社会福祉学は、生活世界と学問的（科学的）世界を中立化させたような場所（「外部」性）と「以前」性の二重性が同時に確保される場所に、身構えることになる。これを、生活世界と学問的（科学的）世界の「中間領域」と表現することも可能かもしれない。それ故、社会福祉学は、その知見を、生活世界のなかで、「相互に原因となり、結果となり、つねに変容しつつ持続」する学、即ち「その基盤としての世界の意味内実をさらに豊潤にしていく過程」のなかに常に在る学ということになるだろう。こうした点は、医学や看護学、栄養学、教育学など、対人援助に関わる学問にも、あてはまるのかもしれない。これらの学問の命脈は、常に持続・過程のさなかにあるということである。そしてその限り、社会福祉(学)には、所謂「永遠の一言」は存在しないということである。社会福祉ないし社会福祉学が、自らこうした力動性を疎外させ、物象化させるならば、社会福祉(学)は、もはやその本質を自失することになる。

さて、本石氏のお尋ねは、こうした持続ないし過程を捉える方法論とは何か、という点である。これに関しては、本石氏のご指摘の「社会福祉の系譜学」の展開こそが、その方法論ということになるだろう。但し、この「系譜学」は、社会福祉の「外部」と社会福祉「以前」という二つの局面を問題系として持ちつつも、この二局面を相互に関連する二重性のなかで捉えていく営みになるであろう。おそらく、本石氏と筆者は、こうした構想の下に、今後も哲学を、そして社会学を展開させていく共通の基盤に立っているのかもしれない。

3. 「応答可能性」という可能性の意味

さて、書評の後半は、本書では明確に論及できなかった件に関して、H.アーレントに依拠しながら、「問わず語り」での指摘がなされている。それは、「他者への応答責任」という問題系である。

行路で倒れた旅人（しかも敵対関係にある旅人）を介抱した「よきサマリア人」という聖書の寓話（ルカ書10章25節）はつとに有名である。他人が自分の目の前で急に苦しみだし、倒れたとしよう。それを間近に目撃した私は、何をすべきであるのか。行為の選択肢としては、いろいろなケースが想定される。例えば、「救急車を呼ぶ」、「人を呼ぶ」にはじまり、「ただみているだけ」、そして「関与するのは厄介なので、逃げる」に至るものとして、その応答可能性のありようを想定することができる。もし、倒れた他者が死に至った場合、その他者が私の知りあいであり、一緒に歩いていたのに、私は通報せず、その場から逃げたということであれば、私は、事の次第では、「保護責任遺棄（致死）」の疑いをかけられることもあるだろう。それは、常識的に考えて、当然、差し出すべき救いの手を差し出さなかったからである。つまり、ケアをする立場にありながら、他者が苦しんでいること、倒れていることに対する応答責任を怠ったということになる。

本書全体を通して、「応答責任」の問題系は、確かに触れられなかった。だが、本石氏によってご指摘頂いたこの問題系は、実は第Ⅱ部の主人公である障がい者と女性、第Ⅲ部の主人公である死に逝く者と残された者に対する応答の問題であることになる。これらへの応答の仕方は、単に共に居るという単位やソーシャルワークなど、多様であろう。だが、もっといふならば、実は、先述した社会福祉サイドと社会学サイドの件の「喧嘩」は、この「応答責任」をめぐる問題であったということができる。そこに問題を抱えた人がいる。そのことに対して応答するのが、社会福祉学の使命である。では、社会学はどうするのか?……（そして哲学は?……）

おそらく、この文脈で、社会学にできることは、問題状況の説明など、事後的な事柄に限定されよう。この点で、社会学には社会福祉(学)ほどの実践力はないだろう。だが、そうであるが故に、社会学は社会福祉学に対して、社会福祉学がその専門性へと視線を向けるが故にみおとしたり、気

如何にして社会福祉の「可能性の条件」を問うか？

づかないことを照射することは、可能であろう。つまり、社会福祉（学）には困難な社会福祉現象と社会福祉（学）の営みの異化は、果たせるのではないだろうか。

「他者への応答」は、人間存在の複数性と相互性を基盤としつつ、同時に相互性を維持し、あらたに人間存在の共同性を構築し続けている。つまり、「他者への応答」は人間存在の基盤になっている。

もし、このようにいえるのであれば、社会学者と社会福祉学者、社会学者とソーシャルワーカーとの自他関係にも、同じことがいえるのではないだろうか（そして、哲学者にも！）。勿論、社会福祉実践には社会学的な観方が入り込む余地がある以上、一人の人間が両者の役割を担うということも考えられる。だが、本書は、社会学サイドからの「喧嘩」に対する社会福祉学サイドからの応答、そして社会福祉学サイドからの「啖呵」に対する社会学サイドからの応答として実現されたことを考えると、本石氏のご指摘は、本書が成書となるまでのプロセスを見事に射抜いている。

ところで、本石氏は、上述の引用に続けて、次のように指摘する。

「他者への応答」が生じるということは、他者の生の要求に対する「私」に「責任（responsibility）」があり、それと同時に「私」の生の要求に対しても他者にも責任があるという事態である。こうして人間存在の相互性は、相互応答性として理解されるべきであり、そこには人の生に対する「責任」の自覚が要請されている。

この指摘は、人間の複数性、即ち相互行為の内に生じる「責任」であり、「自覚」である。それは、私や他者の、人間としての「責任」であり、「自覚」である。社会福祉の営みが、人間に、そしてその人間の生死に、関わることを本質とすることの含

意は、まさにこの点にある。この倫理的要請がもつ意味は、社会福祉学にとっても、社会学にとっても、実に大きいといわなければなるまい。

同じことは、社会福祉学と社会学の関係にも当てはまる。この「相互応答性」が成立するには、何が必要なか。それは、少なくとも、社会学の社会福祉学化でも、その逆でもない。社会学は、社会福祉学に対して、その実践力という異質な視線を諒解しつつ、そのみに終始するのではなく、その都度の社会福祉の営みを異化させていくことに、かかっているのではないだろうか。問題の所在は、引き受けるべき「責任の多元性（専門性）」を損なわないこと、そしてそれに基づく社会福祉学と社会学の両面作戦をとることにあるのではないだろうか。そうであるとしたら、社会福祉学者やソーシャルワーカーは、社会学者の素養をもつこと、そして社会学者は社会福祉学者やソーシャルワーカーの素養を持つことが必要になるのかもしれない。

4. おわりに

上記の議論が、社会福祉学において、まともに取り上げられることは^{まれ}怖であろう。おそらく、「社会福祉の哲学」や「社会福祉の社会学」が終わるところから、社会福祉学が始まるのかもしれない。だが、それでもやはり、社会福祉学と哲学・社会学（そして哲学）は、「なお始めと終わりを一緒にすることができるであろう」（Natanson, 1977: 二三）。それは、例えば死によって照射される生の意味、あるいは〈不幸〉と遭遇することによってはじめてみえてくる生の意味、そしてそれらを結晶化させる痛みとそれへの共感とともに。

死が見えるから生もまた
見えて来るのではないか
たなごころで
水を掬うように時間を掬い
しみじみと その歩み
その変化

その重さ
その意味 そしてその
はかなさと同時に在る永遠性-を
いまこそ
感じ取ることができるのではないか
死が見えてきたから
生が見えてくるのではないのか
(岡博詩集『連袴詩篇』作品14)

こうした意味の世界と、どのように向きあうのか、この点では社会学も社会福祉学も（そして哲学も）、生とその意味をめぐる同じ問題系のなかに同居しているのではないだろうか。

註

(1) なお、本稿では論及できなかつたが、三つ目の問いは、社会福祉と公共性との関連、および社会福祉と社会の関連に関するものである。参考までに、下記に掲げておく。

問い③ 社会福祉と公共性 ("Why" -problem)

(社会福祉の存在(根拠)論、公共的価値=公共善の実現、その実践としての社会)社会福祉実践が「社会的ニーズ」を必要とする人びとへの「社会的サービス」を提供することを意味するのであれば、社会福祉は「人はいかに生きるべきか」という倫理的な問いに対するひとつの解答である。つまり「人間存在の複数性と相互性」という人間理解(人間存在論)に基づくならば、社会福祉実践は、社会的な「ニーズ」と「サービス」のやり取り(流通)によって、人間共同体における個々人の「生物学的生命」の維持と「生ける人格」としての尊厳に「人間として存在すべき積極的価値」を見出している。つまり、社会福祉実践とは人間存在の積極的価値の実現であり、そのプロセスである。(あるいは、こうした社会福祉実践によって、人間存在の相互人格性に積極的価値が付与される、また

は創造される。)

さらに「人はいかに生きるべきか」という問いは「社会(共同体)はいかなるものであるべきか」という問いを導き出す。というのも、人間は、そもそも「複数性と相互性」という関係のなかに、そしてそうした関係のなかでしか生きていくことができないからである。そしてこの「複数性と相互性」という関係において、与えられた積極的価値が社会の構成員に共有されることが、個人の生存権、あるいは「生ける人格」としての尊厳のための「可能性の条件」ということがきょう。つまり、個々人の担う価値は、個に先行する社会全体(実際には、具体的な共同体)の価値に依拠し、その価値の基準に限定される。換言すれば、個々人の価値は、個人の「可能性の条件」である相互人格的な共同体において共有される価値に依拠している。このように共同体においてそのつど共有される価値を公共的価値(公共善あるいは公共性)と呼ぶこともできよう。

しかしながら、個人に先行する公共的価値もまた、共同体の構成員である個々人から、独立に、すなわち無関係に存在するわけではない。というのも、公共的価値は、共同体においてそのつど共有されることによって(のみ)、その意味が成立するものだからである。こうした個々人の担う価値と共有される価値との相関的な在り方を考慮するならば、「人はいかに生きるべきか」という個々人に還元されるようにも思われる問いへの解答は、「いかなる価値を共有するか」という人格共同体への問いへと、問い直されなければならない。→「いかなる価値が共有されるべきか」、「共有される価値が公共善(公共性)であるのか」、「いかなる共同体が公共的価値をもちうるか」、「目指されるべき共同体はいかなるものか」(本石、「書評・『リプライと問い』のためのメモ 2009/12/02」)

如何にして社会福祉の「可能性の条件」を問うか？

引用文献

- Arendt,H. (1958) 『人間の条件』 ちくま学芸文庫
Husserl,E. (1959) 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』 中央公論社・中公文庫
Natanson,M. (1977) 「英語版序言」、佐藤嘉一訳
『シュッツ・パーソンズ往復書簡集 社会理論の構成』 (1980) 木鐸社
岡 博 (1988) 『岡博詩集 連袴詩篇』 山口県文芸懇話会
和辻哲郎 (1934) 『人間の学としての倫理学』 岩波書店